

令和8年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第3号  
(6月の発生予想)

令和8年5月29日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稻】

葉いもち	量：並 程度：少発生 (発病度1~20) 時期：並	① 現在、苗いもちや葉いもちの発生は平年並に未確認。(±) ② 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±~+)
【防除上の留意事項】 補植用置苗は早急に除去する。		
ニカメイチュウ 第1世代	量：並 程度：少発生 (被害株率1~29%) 時期：並	① 越冬前の刈株調査では被害株率は平年比やや低く、越冬虫量もやや少ないと推測される。(－) ② 越冬世代成虫のフェロモントラップ等の誘殺は平坦部で5月第3半旬頃から始まり、発生時期は平年並(±)、誘殺数は平年比やや多い。(＋) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)

【大豆】

ネキリムシ類	量：並	① 5月第5半旬までのフェロモントラップ誘殺数は、タマナヤガは平年並~やや少ない、カブラヤガは平年並~やや多い。(±) ② 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
--------	-----	---

【なし】

黒斑病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1~5%)	① 5月後半の発病葉及び発病果の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
黒星病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1~5%)	① 発生量(葉)は5月前半では平年並み、5月後半では平年比やや少ない。(－) ② 発病果の発生が下越地区で確認された。(＋) ③ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
【防除上の注意事項】 ① 効果的に防除するためには二次伝染源の除去が重要であり、発病した葉、果実は見つけ次第除去して園地外に搬出し適切に処分する。 ② 防除効果を高めるため、薬剤散布は発病部位を除去した後に行う。 ③ 耐性菌の増加を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】つづき

セイヨウナシ 褐色斑点病	量：並～やや多い 程度：少発生 (発病葉率1～5%)	① 前年の発生量(葉)は平年比多く、越冬菌量も平年比多いと推測される。(+) ② 5月後半の発病葉は未確認で、発生量は平年比やや少ない。(－) ③ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<b>【防除上の注意事項】</b> ① 発病した葉、果実、枝はせん除し、園地外に搬出し適切に処分する。 ② 例年6月下旬頃から発病葉が急増するので、防除間隔が開きすぎないように注意するとともに、天気予報に留意し、降雨前散布を徹底する。 ③ 果実感染を抑制するため、袋かけは遅くとも6月5日までに実施する。		
ハマキムシ類	量：やや多い 程度：少発生 (被害葉率1～15%)	① 5月後半の被害葉の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 主要種であるリンゴコカクモンハマキは、5月第4半旬からフェロモントラップへの誘殺が確認されており、誘殺数は平年比多い。(+) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)
<b>【防除上の留意事項】</b> 第1世代幼虫の防除時期は、6月中旬～7月上旬である。		
アブラムシ類	量：並 程度：少発生 (寄生葉率1～5%)	① 5月後半の発生量(寄生葉)は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<b>【防除上の留意事項】</b> ① 新梢先端部位をよく観察し発生を確認したら早期に防除を行う。 ② ワタアブラムシは薬剤抵抗性が発達しやすいので、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。		
ハダニ類	量：並 程度：少発生 (寄生葉率1～5%)	① 5月後半の寄生葉の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<b>【防除上の留意事項】</b> ① ハダニ類は発生が多くなると防除が困難となるため、園内をよく観察し、発生初期に防除を行う。 ② 枝の先端部まで薬剤が十分かかるよう留意する。園地周縁部などの薬液のかかりにくい場所は補正散布を行う。 ③ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。		

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【なし】つづき

<p>ニセナシサビダニ</p>	<p>量：並 程度：少発生 (被害葉率1～5%)</p>	<p>① 5月前半から被害葉が確認され、5月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)</p>
<p>【防除上の留意事項】</p>		
<p>① 越冬する第2雌が出現する6月中～下旬に防除を行い、越冬量を減らす。 ② 若い葉を好んで加害するため、徒長枝の先端部まで薬剤が十分かかるよう留意する。園地周縁部などの薬液のかかりにくい場所は補正散布を行う。</p>		
<p>果樹カメムシ類</p>	<p>量：並～やや多い 程度：少発生 (被害果率1～2%)</p>	<p>① 5月後半の被害果の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 5月第4半旬までの予察灯への誘殺数は、おおむね平年並。(±) ③ フェロモントラップでは、チャバネアオカメムシの誘殺数が平年比多い地点があった。(+)  ④ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)</p>
<p>【防除上の留意事項】</p>		
<p>① 夜温の上昇に伴い活動が盛んになり、園地への飛来が増加するので注意する。園地内でカメムシ類を確認した場合には、カメムシ類が飛来する夕方か活動が鈍い早朝に防除を行う。 ② カメムシ類は局地的に飛来し、集中的に加害する傾向がある。山林や雑木に隣接する園地や過去に被害を受けた園地では特に注意する。 ③ 果実への袋かけ作業は遅れないように実施する。</p>		

【もも】

<p>せん孔細菌病</p>	<p>量：やや多い 程度：少発生 (発病葉率1～10%)</p>	<p>① 伝染源となる春型枝病斑の発病枝率は平年比やや少ない。(－) ② 5月後半の発病葉の発生量は平年比やや多い。(+)  ③ 5月に強風などの感染に助長的な条件が発生した。(+)  ④ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)</p>
<p>【防除上の留意事項】</p>		
<p>① り病枝(春型枝病斑)は周辺の発病葉とともにせん除し、園地外に搬出し適切に処分する。 ② 果実感染を抑制するため、早期の袋かけに努める。 ③ 防風ネットの設置・補修等防風対策を実施する。 ④ 耐性菌の増加を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。</p>		
<p>灰星病</p>	<p>量：並 程度：少発生 (発病果率1～5%)</p>	<p>① 5月後半の被害果の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)</p>

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

### 【もも】つづき

モモハモグリガ	量：並 程度：少発生 (被害葉率1~15%)	① 5月後半の被害葉は未確認で、発生量は平年並。(±) ② フェロモントラップでは5月第4半句から第1世代成虫が誘殺されており、誘殺数は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
【防除上の留意事項】		
① 第2世代幼虫の防除時期は、6月上中旬である。 ② 7月以降は世代が入り混じって防除効果があがらない場合が多いので、第2世代幼虫の防除を徹底する。		
ナシヒメシンクイ	量：やや多い	① 5月後半の被害果の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや多い。(＋) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
【防除上の留意事項】		
① 第2世代幼虫の防除時期は、第1世代成虫の誘殺盛期の7~9日後である。 ② フェロモントラップの越冬世代成虫の誘殺盛期は4月第4半句であり、第1世代成虫の誘殺盛期は6月第4半句と推測される。 ③ 心折れを見つけた場合は、その部位をせん除し虫の密度を減らす。 ④ 新梢伸長期は心折れの発生防止に重点をおいて、定期的に薬剤防除を行う。		
果樹カメムシ類	量：並~やや多い 程度：少発生 (被害果率1~2%)	① 5月後半の被害果の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 5月後半までの予察灯への誘殺数は、おおむね平年並。(±) ③ フェロモントラップでは、チャバナアオカメムシの誘殺数が平年比多い地点があった。(＋) ④ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
【防除上の留意事項】 「なし」の項を参照する。		

### 【ぶどう】

灰色かび病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病果房率1~10%)	① 5月後半の発病葉および発病果房の発生は未確認で、発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
-------	-----------------------------------	--

### 【かき】

円星落葉病	感染量：やや少ない	① 前年の発生量はやや少なく、越冬伝染源量もやや少ないと推測される。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
カキクダアザミウマ	量：やや多い	① 前年の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。(＋)

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【かき】 つづき

ハマキムシ類	量：やや多い	① 前年の被害果の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 5月下旬までのフェロモントラップへの誘殺数は、平年並～平年比多い。(±～＋) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
フジコナカイガラムシ	量：並 時期：並～やや早い (第1世代幼虫ふ化盛 期：6月第5～6半 旬)	① 前年の被害果の発生量は近年比少ない。(－) ② フェロモントラップへの誘数は5月第3半旬から認められ、誘殺数は平年比やや少ない。(－) 一部一般ほ場では5月第1半旬から誘殺が認められた。 ③ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】 フジコナカイガラムシの最も重要な防除時期は第1世代の若齢幼虫期であるため、この時期(6月中旬～下旬)の防除を徹底する。また、防除に当たっては拡張性の高い展着剤(まくぴか等)の加用が有効である。</p>		

【冬春トマト(施設)】

灰色かび病	量：並 程度：少発生 (果実発病度1～20)	① 5月後半の発生量は、葉及び果実ともに平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(－)
葉かび病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病度1～20)	① 5月後半の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(－)
アザミウマ類	量：やや多い 程度：少発生 (寄生花率1～10%)	① 5月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
コナジラミ類	量：並 程度：少発生 (寄生株率1～25%)	① 5月後半の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)

【すいか】

つる枯病	量：並 程度：少発生	① 5月後半の発生は未確認。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
炭疽病	量：並 程度：少発生	① 5月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。(＋)
アブラムシ類	量：並 程度：少発生	① 5月後半の発生は未確認。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)

<b>【作物名】</b> <b>病害虫名</b>	<b>予報内容</b> 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
-----------------------------	---	-------

**【すいか】つづき**

オオタバコガ	量：並	① 5月後半の被害は未確認。(±) ② 5月下旬までのフェロモントラップの誘殺数は、平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)
--------	-----	--

**【秋冬ねぎ】**

べと病	量：並 程度：少発生 (発病株率1~10%)	① 夏ねぎで5月後半に発生が確認されている。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(-)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
さび病	量：並 程度：少発生 (発病度1~5)	① 夏ねぎでの5月後半の発生は未確認。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(-)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
ネギハモグリバエ	量：やや多い 程度：少発生 (被害度1~10) 時期：並	① 夏ねぎでの5月後半の発生は未確認。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
ネギアザミウマ	量：やや多い 程度：少発生 (被害度1~10) 時期：並	① 夏ねぎで5月後半に被害が確認されている。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。

**【ユリ(球根養成)】**

葉枯病	量：並	① 5月後半の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。(+)
アブラムシ類	量：並	① 5月後半の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)

～ 防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病害虫雑草防除指針」を参照してください ～

注1：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多  
いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の5段階で表記しています。

②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発  
生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。

注2：「予報の根拠」の、(+)は発生量を増加させる要因、(-)は発生量を減少させる要因、  
(±)はどちらともいえない要因を示しています。

～ 農薬は適正に使用しましょう ～

【新潟県農薬危被害防止運動実施期間：6月1日～8月31日】

- 農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
- 使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使  
きましょう。
- 農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺  
の生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
- 農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
- 水田で湛水して農薬を散布する場合は、処理後7日間の止水を厳守し、落水しないようにしま  
しょう。

【参考】北陸地方 1か月予報（5月30日から6月29日までの天候見通し）

（新潟地方气象台：令和8年5月28日発表）

<予想される向こう1か月の天候>

- ・暖かい空気に覆われやすいため向こう1か月の気温は高く、期間のはじめはかなり高くなる見込みです。
- ・期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です

2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

3～4週目は、高い確率60%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）>

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10	30	60
降 水 量	30	40	30
日照時間	30	30	40

<気温経過の各階級の確率（%）>

	低い	平年並	高い
1週目（5月30日～6月5日）	10	10	80
2週目（6月6日～6月12日）	20	40	40
3～4週目（6月13日～6月26日）	10	30	60